

流動的で相互作用的な身体と自己

日本の美容整形の事例から

Fluidity and Interactivity Between Body and Sense of Self :
An Anthropological Approach to Cosmetic Surgery in Japan

川添裕子

KAWAZOE Hiroko

はじめに

①外見の治療の歴史と日本における美容整形の展開

②整形経験者の身体と自己をめぐる議論

③飲み込み, まとわりつき, 消える身体

④関係の中の身体

おわりに

【論文要旨】

近代以降の身体観の変化と併行して、美容整形は拡大し続けてきた。美容整形に関する人文社会科学的研究では、身体の管理・監視に焦点を当てた分析と、整形経験者の能動性に焦点を当てた分析が対立的な議論を構成してきた。しかしいずれも近代社会とその対極の個人という図式に依拠している点では共通している。近代的身体観と近代的個人の概念に基づいた分析においては、美容整形経験者の身体と自己は、社会に従属するか、あるいは他者と無縁に刷新されるものと描かれる。本稿は、術前から術後に亘る聞き取り調査をもとに、従来の研究では背景に退いていた状況性と関係性および手術後の馴じむ過程に着目して、日本の患者の身体と自己のありようについて検討するものである。

手術前、患者たちの身体と自己の感覚は画像情報的で、普通でないというようなスティグマ化された身体形態に固定化している。この日常生活全体に暗い影を落とすほどリアルティを持つ身体は、手術後は意外に早く忘れさられていく。固定化していた身体と自己の感覚は、手術を契機に流動的に変化しうる。しかし単に手術が技術的に成功すればいいだけではない。日本では、美容整形の周縁性・境界性がとりわけ顕著である。相対的に普通が強調される中で、ほとんどの患者はタブー視される美容整形を秘密にする。患者たちは痛みや違和感の残る身体に馴染むと同時に、その身体で他の身体の前に出てともにいることに馴染んでゆく過程で、手術前とは微妙に異なる身体と自己の感覚や他者の反応や新たな関わり方を少しずつ自分の身体に染み込ませてゆく。この一連の経験の中でそれまでの価値観や他者との関係を捉え直す患者もいるし、しばらくしてまた画像情報的な身体形態の追求に向う患者もいる。

本稿の分析結果からは、身体と自己の感覚と認識は、そのつどの状況性と関係性の中で立ち現れる流動的で相互作用的なものであることが示唆される。

【キーワード】 身体加工, 近代, 関係性, 生物医療

はじめに

現代日本には身体を美しく、若々しく、健康に維持するための商品やサービスが溢れている。中でも顕著な効果をもたらす美容整形は、メスを使わない「プチ整形」の登場、アンチエイジングへの関心の高まりを受けて急速に拡大している⁽¹⁾。基本的に保険外診療なので病院経営の面からみても魅力的だ。一方で美容整形に対する抵抗感も相変わらず存在している。たとえば美容整形を受けた人（／身体）は、しばしば「人工的」、「ニセモノ」、「改造」などと揶揄される。また「失敗例」も週刊誌やテレビを通して伝わってくる⁽²⁾。

美容整形は確かに人為性が顕著である。しかしマルセル・モースが身体技法を通して明らかにしたように、身体は文化的刻印を受けずには存在しない⁽³⁾。モースの理論をもとに人類学者の坂井信三は、社会のイメージに合わせて身体を作る行為全般を「身体加工」と呼んでいる⁽⁴⁾。坂井は、伝統社会の身体加工は明確に規定された社会的人格の理想と人生の諸段階に応じていると述べる。共同体が個人の身体にその社会体系を刻印し、個人は自らの身体に文化を受肉する。人生の節目で行われる儀礼の数々は、共同体メンバーがその経験を共有し、かつ社会的人格の変換を確認する公的な場ということになる。

このように伝統社会の身体加工を社会的人格の転換とみる見方は、モースが提起した公的カテゴリーとしての人格（person）と心理的カテゴリーとしての自己（self）の議論に連なるものである⁽⁵⁾。モースは、役として演ずるべき人物から法的存在としての人格、倫理的人格、形而上学的実体としての人間の人格を経て、19世紀西洋で心理学的存在としての人格概念が確立する過程を示した⁽⁶⁾。人類学者の古谷嘉晃は、モースの議論を個人主義的人間観の基礎をなすものとみなし、「何が個々の内部に属し、何がそうでないのかをはっきりさせることに苦慮し、はみ出してしまいそうになるのを、懸命に明確な内部へと囲いこもうとするプロセスの所産として、〈個人〉の概念は、ようやく私たちが理解するような形をとる⁽⁷⁾」と述べている。この〈個人〉は、単に生物としての経験的な個人（個別の人）をさすのではなく、近代イデオロギーに見出される独立した、自立的な、（本質的に）非社会的な、精神的存在とみなされるものである⁽⁸⁾。

人類学の中川敏は近代化論の中で、身体が「わたしがそうであるもの」から「わたしが持っているもの」へ変貌したことで、生物医療、臓器移植の道も開かれたと述べている⁽⁹⁾。「わたしが持っているもの」としての身体は消費の対象でもある。理屈の上では、消費者としての〈個人〉は「わたしが持っているもの」としての身体を自由に加工できる。伝統社会においては標準化された外見が社会的人格を示していたが、近代西欧的個人主義のもとでは各人が身体と自己を作りあげなければならない。この時人間のあるべき姿に大きな影響を与えるのが、西欧で誕生しその文化的影響を受けている生物医療である。

本稿が対象とする美容整形は、生物医療の一領域として近代的身体観と近代〈個人〉概念を前提にしている。消費者でもある患者は、「わたしが持っているもの」としての身体を自らの意志で劇的に変えるということになる。これを受けて人文社会科学においては、身体を管理・監視する近代システム、均質的な自己認識の基準を浸透させる装置としての美容整形に焦点をあてたものと、美

容整形を選択した個人の能動的なアイデンティティ交渉に焦点を当てたものが対立的に議論されてきた。しかしこうした議論も、古谷が指摘する「無理やり設定した『容器』へと無理やり『中身』を囲い込んだ」近代的な〈個人〉の概念を前提に展開してきた面はないのだろうか。⁽¹⁰⁾

本稿は、主に1990年代後半に日本と韓国で行った美容整形に関する調査をもとに、日本の患者の身体と自己のありようについて分析していく。⁽¹¹⁾術前から術後へと時系列的に追っていくと、患者たちは共同体的な規範、具体的な状況と関係におけるやり取りの中で自らと他者を認識していることがみえてくる。患者たちの〈自分〉感覚や確信はしばしば固定化されるが、流動的に変化もする。⁽¹²⁾美容整形はその変化のきっかけになりうる。しかし単に形態が美しくなればいいわけではない。患者の語りには、自分の身体に馴染む（あるいは馴染めない）、その身体で他者の前に出て、ともにいることに馴染む（あるいは馴染めない）過程の重要性があらわれている。⁽¹³⁾本稿では、状況性、関係性、馴染む過程に焦点を当てることで、流動的で相互作用的な身体と自己のありようについて論じる。現実には生きられる身体経験は、近代的身体観と近代的な〈個人〉の概念の枠組みには収まりきらないことを示すつもりである。

①……………外見の治療の歴史と日本における美容整形の展開

美容整形の背景として、外見の治療の歴史と日本での展開について簡単に概観しておきたい。再建外科の手術は、かなり古くから行われている。記録によると、紀元前600年頃のインドにおいて鼻を切断された男性に皮膚移植がなされた。⁽¹⁴⁾16世紀末にはイタリアのタリアコッチが鼻の再建術を行っていた。⁽¹⁵⁾形成外科（plastic surgery）の始祖とされるタリアコッチだが、彼の行為はキリスト教世界においては神への冒瀆とみなされ、ローマ法王庁から破門されることになる。⁽¹⁶⁾その後外科手術全般は、キリスト教的な人間観および技術的限界のために長い間停滞してしまう。大きく発展するのは19世紀に入って麻酔術と無菌操作術が導入されてからである。

近代的な美容整形は、1845年ドイツのDieffenbachによる整鼻術が始まりといわれている。⁽¹⁷⁾同時期の外科医ジャック・ジョゼフによる鉤鼻の手術は、「ユダヤ人」という徴を取り除くものだった。⁽¹⁸⁾外見の治療は戦争負傷者の治療で発展する。⁽¹⁹⁾第一次世界大戦では、口腔外科、耳鼻科、外科などの医師がチームを組んで負傷者の治療にあたった。彼らは戦後、専門分野としての形成外科の中心人物となっていった。⁽²⁰⁾その後欧米や日本など先進諸国では、美容目的での患者が増えていった。近年は、アンチエイジングを望む高齢者もその対象である。⁽²¹⁾また発展途上国でも、「メディカルツーリズム」⁽²²⁾として観光客向けに美容整形を提供するようになってきている。美容整形は完全にグローバル化した。

さて日本で「美容整形」という名称が一般に浸透してきたのは戦後である。⁽²³⁾その後、美容整形を「標榜科」⁽²⁴⁾（政令で定める診療科名）にする運動が始まる。1978年標榜科に認められるが、名称は「美容外科（Aesthetic Surgeryまたはcosmetic surgery）」となった。⁽²⁵⁾これを受けて、美容整形を独立した科目とみなす開業医中心の「日本美容外科学会（JSAS：Japan Society of Aesthetic Surgery）」と、形成外科と美容外科を親子関係とみる医師が中心の「日本美容外科学会（JSAPS：Japan Society of Aesthetic Plastic Surgery）」⁽²⁶⁾という同名の学会が設立される。早くから週刊誌や

雑誌で美容整形広告を繰り返してきたのは、主に「日本美容外科学会（JSAS）」に属すチェーン病院⁽²⁷⁾である。学会誌にも、市場の論理で身体を向上させる方向性が窺える⁽²⁸⁾。たとえば岡部夕里医師は、美容外科医一人一人がトレンドを作る意欲をもつことが重要で、医者⁽²⁹⁾の役目は患者のニーズに適切に⁽²⁹⁾応えて患者を満足させるサービス業であると述べている。また自身が美容整形の広告塔でもある高須克弥医師は、アジアでの美容整形市場を拡大させるためにアジア人の美しさを認めさせ、アジア人のように美しくなりたい人⁽³⁰⁾たちを増加させる必要があると述べている。短い間隔でモデルチェンジやマイナーチェンジを繰り返す自動車業界のように、美容整形の分野でも新しい技術が次々に発表される。一方、形成外科医から成る「日本美容外科学会（JSAPS）」は、市場論理での医療の⁽³¹⁾応用には一定の距離を置いてきた。結果的に日本では、美容整形は専門の開業医院を中心に展開し、大学病院形成外科は再建医療を中心にするというすみ分け状態が長い間続いた。

このような二分された状況は1990年代末から変化してきている。大学改革、医療改革を契機に、それまで美容医療に距離を置いてきた大学病院形成外科が次々に美容外科を掲げるようになる⁽³²⁾。二つの「日本美容外科学会」の方向性も、アンチエイジング医療や再生医療などの中では統合しつつある。平田修人医師は、美容整形を高齢化社会の「プラスの医療」と呼んでいる⁽³³⁾。日本における美容整形の実施件数は不明だが、その数居が年々低くなっているのは確かである。それは美容整形の技術的向上だけでなく、身体形態の維持・向上を肯定的にみる日本社会の価値観にも支えられている。実践の増加・拡大という現象だけを捉えれば、美容整形は、消費者としての〈個人〉が自らの意志で「わたしが持っているもの」としての身体を変える行為にしかみえない。

②……………整形経験者の身体と自己をめぐる議論——「近代的規範への従属」,「アイデンティティの再交渉」,「身体のマイナーチェンジ」の前提

美容整形の拡大は、その実践自体が問題化されることでもあった。中でも患者の大半を占める女性たちの身体と自己をどのようにみなすのかということは主要な議論の一つである。

最も早くから美容整形を対象化してきたのは欧米のフェミニスト研究者たちである。初期のフェミニズムにおいて、女性患者は美の規範の犠牲者とみなされた。これは女性を一方向的に犠牲者に貶めてしまう点で問題があったが、フーコー理論によって新たな展開に繋がっていく。フーコー派のフェミニストは、女性たちの主体的な選択が規範への順応になっている点を議論の俎上に載せた。その一人スーザン・ボルドーは、自由な意志で身体を選択したり作りだしたりできるという考え方を「可塑性（plasticity）のパラダイム」と呼ぶ⁽³⁴⁾。そして身体を無限に改良できるという考えは幻想にすぎないのに、女性たちの「自由な意志」を隠れ蓑にして、ある特定美の方向への「正常化（normalization）」⁽³⁵⁾に繋がる選択の誘導や、そこに追いやる文化的言説やイデオロギーが巧妙、複雑、かつ大々的に張り巡らされていると指摘する。女性たちは均一化した見本に照らして自らの身体を評価し、判断し、「鍛錬」し、そして「修正」する。こうしたプロセスは単に主体の形を変えるだけではなく、主体を正常化する実践でありフーコー的な意味での「規律（discipline）」とみなされる。ボルドーは、美容整形についても自己正常化装置の一つとみなして批判している。フーコー派の研究は自由な選択という名に隠された美の規範への従属を指摘した点で意義がある。その一方で、抽

象的で画一的な自己認識を内面化し具現化する存在とされる女性たちの営みは浮かび上がってこないという面もある。

エイジェンシー派とも呼ばれるキャシー・デービスは、抑圧的な美のシステムの存在自体を認めた上で、女性たちの能動性に焦点を当てた。⁽³⁶⁾ オランダで美容整形経験者へのインタビューを行ったデービスは、彼女たちの語りの特徴として次の四点を指摘する。まず美容整形の物語にはビフォー／アフターがあるという。手術で身体を変えることは当事者の伝記的な「ターニング・ポイント」になる。女性たちは自らの決断を意味あるものにするために過去を振り返り、将来の意味を考えるために先を見る。二つ目に、美容整形の物語が苦悩の軌跡として提示される点があげられる。美容整形は、この苦悩の軌跡を中断する出来事として位置づけられる。三つ目は、美容整形の物語には患者たちの熟考が随所にみられる点である。こうした熟考に対してデービスは、女性たちが自らの決断を意味あるものにする試みであり、また自らの経験を自明とも美容整形を受ける理由に問題がないともみなしていないことを示すものと解釈している。そして四つ目には、美容整形はアイデンティティについての物語であるという点があげられる。美容整形の経験者は、語りを通して手術前どうだったのか、どうなりたいと望んだのか、どうなったのかという伝記を創り上げる。デービスは、これら語りの特徴は美容整形を通した身体と自己の変容の感覚を作っていると指摘している。美容整形を受けたことを自己の物語として語り、かつその物語を脱構築していく。外科的介入は始まりにすぎない。美容整形は、患者と新しい身体との関係の再交渉、自伝の変容、いつもの生活に戻る道を見つけることを必要とするのだとデービスは語る。

美容整形は美ではなく、アイデンティティに関係している。自分とは何かという感覚に合致しないからだに閉じ込められたと感じている女性にとっては、美容整形は、自分のからだをとおしてアイデンティティの再交渉をおこなう方法となる。美容整形とは、自分が選んだわけではない条件の下で、力を行使しようとする事なのである。

[『Reshaping the Female Body』163頁]

デービスの研究において、女性患者たちは文化的盲従者ではなく、自ら人生を切り開こうとしている行為体とみなされている。デービスは美容整形の両義性を指摘した点で意義がある。しかしアイデンティティ交渉という視点は、身体の「向上」が当たり前のように要求される中では終わりのない美の追求をも含意することにはならないのかという疑問も残る。またデービスは手術後女性たちが自らの経験を「物語」としてパッケージにして語ることをアイデンティティの交渉過程、身体と自己の関係の再構築過程とみなしているが、時系列的に聞き取り調査をしてみると語りは必ずしもパッケージ化されるわけではない。

社会学の谷本奈穂は、美容整形と化粧に関する調査研究から、整形経験者のアイデンティティのありようを問題にしている。⁽³⁷⁾ 谷本が着目するのは、外見を褒められる人ほど美容整形の動機に「自己満足」を挙げる点である。そこから谷本は、女性たちは「実際に言われる評価」ではなく、モノや技術によって支えられた「自分で想像した他者の評価」が重要で、それに基づいて身体を変えていると解釈する。さらに周囲の人にもわからないし、自分も自分のままだという手術後の経験者の

語りは、デービスが指摘したようなビフォー／アフターを否定するものだと述べる。谷本は、美容整形には女性たちを主体化させる面があると認めた上で、主体化に付随する特徴として「ただ身体を変えてみたい好奇心」、「ビフォー／アフター感覚の少ない自己の一貫性」、「他者評価と自己像を好きに想像している点」、「モノに合わせて身体を加工していく側面」の四点をあげている。そして美容整形の文脈で語られる自分らしさについて、身体をそのまま受け入れるものでもないし、また身体を内面に合わせて作り変えることでもないとして、谷本は以下のように述べている。

それは、今ある身体を生かしながらよりキレイに見えるよう磨くことなのである。いわば「身体
のマイナーチェンジ」、それが整形言説における自分らしさであろう。

[『美容整形と化粧の社会学』104頁]

自己の存在基盤について谷本は、「内面」や「身体」にあるというよりも、加工するという「行為」
や「感覚・嗜好性」に宿るのではないかと述べている。そして美容整形をスパイスにたとえた。

美容整形のように、身体を加工することは、少しだけ自分をズラし、ちょっとだけ自分の枠
を越境できる経験を「味わう」ためのスパイスのようなものなのかもしれない。

[『美容整形と化粧の社会学』221頁]

谷本が描く美容整形は化粧に近い⁽³⁸⁾。確かに「プチ整形」の登場や先端技術の発展などで、美容整形
と化粧の境界は曖昧化している。とはいえ当事者に「後戻りできない」施術であることを強く意識
させる美容整形の経験が、谷本が指摘するような身体のマイナーチェンジを楽しむ軽やかな自己
という説明で十分理解できるのかという疑問も残る。

以上、ボルドーは美容整形という実践を通して自己正常化する女性たち、デービスは制約された
状況下で身体を通してアイデンティティを再交渉する行為体としての女性たち、谷本は身体加工を
通して自分の枠を越境する経験を味わう女性たちを描き出した。ボルドーとデービスの見解は対立
的だが、社会とその対極の〈個人〉という図式に依拠している点では共通している。「近代的規範
に従属する自己」は社会を体現する〈個人〉であり、「アイデンティティを再交渉する自己」は社
会と対立し時に変革する〈個人〉である。つまりボルドーとデービスの描く自己は、近代的な〈個人〉
という同じコインの裏表といえる。またデービスの「アイデンティティの再交渉」も、谷本の「少
しだけ自分をズラし、ちょっとだけ自分の枠を越境できる」ことも、自立した〈個人〉観に依拠し
ている。三人の研究は、意識し判断する近代的な〈個人〉が、「わたしが持っているもの」として
の身体を加工する行為を、「自己正常化」、「アイデンティティ再交渉」、あるいは「身体のマイナー
チェンジ」と解釈したものといえる。

筆者は、韓国を参照点に日本で美容整形に関する研究を行ってきた。そこからみえてくるのは、
手術前の患者にとって生活全体が暗くなるほどリアリティのある身体であり、手術後には意外に早
く忘れ去られてしまうようなあやふやな身体もある⁽³⁹⁾。患者たちは痛みや違和感の残る自分の身体
に馴染みながら、その身体で他者の前に出て、ともにいることに馴染んでゆく。その過程で新たな

生活に踏み込んでいく患者もいるし、しばらくして新たな不満を生じる患者もいる。次項以降では、筆者の聞き取り調査をもとに固定化するも流動的に変化しうる身体と自己について検討していく。

③……………飲み込み、まとわりつき、消える身体

1) 部分に回収される身体と自己

日本の患者たちには、美よりも普通の強調と秘密重視の傾向が見出せる⁽⁴⁰⁾。「普通」は日本では頻繁に聞く語である。しばしば「普通が一番」というように肯定的にも用いられる。しかし何が普通なのかについては対象によって曖昧である。身体に関していえば「普通」は、そうでないとされる人たちを差別する機能も持っている。患者の普通性への渴望には、まず美しくなりたいと言いつらいという状況や個別の思惑が考えられるが、それだけでなく「普通」がハードルとして存在していることも示唆されるのである⁽⁴¹⁾。普通への渴望と秘密の重視の関係については韓国との比較検討の後にあらためて取り上げるので、ここでは普通ではない、他の人と違う、劣っていると訴えた患者たちの語りをみていこう。

(重瞼術希望, 20代, 女性) ……自分の目は普通じゃない……満員電車の中とか、人と接近する時は、目をみられている気がします。

(重瞼術, 20代, 女性) 高校の時から「アイプチ」(二重瞼をつくる接着テープ) ……友達との旅行ではアイプチをしたまま寝ていたし、水泳とかも顔は絶対つけませんでした……アイプチをやっていることに抵抗感があって、そのことを人に知られたくなかった……アイプチをこっそりつけ、いつも気にしたり隠さなくてはいけなかった。

上記女性たちは外出中ずっと身体を意識し続けている。普通でないという自己認識は、患者たちの生活全体を支配しているようにも見える。患者たちが身体に注ぐまなざしは大変厳しい。それは不満あるいは嫌悪を抱く自らの身体部位だけでなく、他者の身体に対しても注がれている。その厳しいまなざしは、自分と他者の身体を比較し、自らの劣等性を喚起している。

(整鼻術, 50代, 女性) この鼻で公の場に出るのは嫌なのでつい断ってしまいます。……鼻を基準にするので誰を見ても自分よりは良く見える。

(豊胸術, 30代, 女性) 自分の中に、いつまでもきれいでいなければならないという気持ちがあるんです。……自分の体は胸以外は全部好き。(川添: 他人の容姿で気になるところはどこですか?) 他の女性で気になる部分は胸で「あれは本物? それともパッド?」って推理。結構当たると思いますよ。……コンプレックスをなくして、堂々と胸のあいたシャツを着たい。

患者の語りにあるコンプレックスという言葉は、カール・グスタフ・ユングが「心的複合体」という意味で用いたのがはじめとされる⁽⁴²⁾。美容整形は、精神医学のアルフレッド・アドラーの「劣等感コンプレックス」概念を導入することで、医療としての正当性を得てきた⁽⁴³⁾。外見の悩みを病理とみることで医療実践が正当化されたのである。心理学者の河合隼雄によれば、この劣等感コンプレックスは優越感も混入している複雑なもので劣等感と同義ではない⁽⁴⁴⁾。劣等性を認めてもその人の人格の尊厳性が失われないと感じている人はコンプレックスをもたないが、劣等感コンプレックスには感情の絡みつきがあると河合は述べている。上記の整鼻術を受けた50代の女性も、鼻のせいで自分の存在自体が劣位に位置づけられることを耐えがたく感じている。彼女の人格は、鼻という身体の一部に回収されてしまっているようにみえる。

身体に不満を抱くきっかけは様々であるが、以下のように周囲の人からからかわれた経験をもつ人が少なくない。

(重脛術, 10代, 女性) 「お岩さん」とからかわれて。それからはそのようにしか見えなくなりました。もの心つく頃から気にしてました。

(整鼻術, 20代, 男性) 同級生から「土人」「鼻が悪い」とからかわれました。……自分でも、鏡や写真を見て他人と違うと思った……。

人は、自分の身体の全体像を決してみることができないし、全部を十分に触れることもできない。自らの身体とは、物質であると同時にイメージの継ぎ合せである。したがって上記の患者のように、他者が言うように自分の身体を認識してしまうのは想像に難くない。彼らの身体感覚や自己認識は、「お岩さん」「土人」とからかわれた箇所⁽⁴⁵⁾に貼りついているようである。

こうした厳しいまなざしは、美容整形を受けることでさらに厳しさを増す可能性がある。たとえばヒロコさん(脛修正, 20代, 女性)は、何度も手術を繰り返したせいで脛がデコボコになっていた。以下の語りにあるように、仕事を辞めたという彼女は、家族以外の人たちと一緒にいられなくなっている。

脛がでこぼこだから人前ではまばたきもできない。……仕事も周囲の視線が気になって退職しました。……目のことを指摘されるのが怖いから消極的になってしまって。それに人と目を合わせないから誤解されるかもしれない……今まで目のことだけに振り回されて犠牲にしたものが多い。同世代の人が経験するようなこと、恋とか習い事とかカラオケとか、そういうこと知らないから全然成長してないと思う。他人の痛みがわかるようになったことはプラスだけど、もうやめにした。……手術前の目が良いとは思わないけど、今よりマシなので、とりあえずは手術前の目に戻りたい。

「……もうやめにした……とりあえずは手術前の目に戻りたい」と語るヒロコさんだが、彼女の最終目標はもっと先にあった。ヒロコさんは、テーブルの上にあったメモ用紙に理想の目を描き

ながら次のように語っている。

自分の中では、理想の目のデザインは全然変わってないんです。何とかそれに近づけたくて……。今の自分は仮の姿、本当の姿になって積極的にになりたい。

この時のヒロコさんは、洋服のデザインをしているようだった。手術前、患者は医師と一緒に鏡を見ながら具体的な手術後の形について話し合う。その過程で彼女たちのまなざしは、しばしば外科医以上に厳しくなっていく。筆者には、部分に回収された患者の自己意識がその身体から抜け出て外科医と同じ他者の視線で自分の身体を眺めているように感じられた。

ある患者たちの自己認識は「普通でない」と感じる身体部分に固定化されてしまっている。彼らは厳しいまなざしで自らと他者の身体をみつめ、比較し、審査し、自分の劣等性を確信する。ステイグマ化したある部分が日常生活全体を覆っているような患者の姿は、「ただ身体を変えてみたい好奇心」、「他者評価と自己像を好きに想像している点」といった谷本の描く当事者像からは遠い。哲学者であり心理学者でもあったジョージ・ハーバード・ミードは、多くの哲学者が精神と自己意識をもった個人が社会とは無関係に存在しうると考えた中で、自己を社会の産物⁽⁴⁵⁾と考えた。人は成熟とともに他者に反応する能力を発達させる。美容整形も、他者との相互作用の面を抜きには語れない。

患者たちの身体は、人格全てを飲み込んでしまうようなリアリティをもっている。しかし手術後、その身体は、次項で示すように意外にあっけなく忘れられる。

2) 揺らぎの中の〈その人らしさ〉

美容整形は極めて短時間で身体に不可逆的な加工を施す。筆者は、劇的な変化の中で〈自分〉という感覚はどう保たれるのかという疑問を抱いて調査を開始した。そのため日本で調査を受け入れてくれた外科医から「人の噂は七十五日、自分の顔を忘れるのも七十五日」と言われた時も、にわかには信じがたかった。しかし調査を始めてみると、患者たちはもっと早くに忘れていたようだった。

(重瞼術後5カ月, 10代, 女性) みんなに「変わったね」、「かわいくなった」って言われる。……違う人と思っちゃう人もいるの。プールで私がいるのに全然気がつかなくて(笑い)……誰も「目を二重にしたの?」って聞かないから、私も何にも言わない。でも、もし二重にしたって子がいたら、先生(担当医師)のこと教えてあげる。(川添:手術前の顔が懐かしいとかありますか?)前の顔?もう忘れちゃった。

(整鼻術後3週間, 50代, 女性) 手術で体力が落ちたせいでしょうか、目が疲れてクマが出てきて。目の印象が変わったのではないかって心配です。鏡で自分の顔を見ると違う目、違う鼻と思うんですけど、ジッと見ていると慣れてくる。……(術後2カ月)今の顔に慣れてきて、前の顔はもう忘れてしまったよう。……誰も「整形したの?」とは言わないんですけどね。

……気が付いていても言わないのか、気が付かないのか……。

(重験術後2週間, 20代, 女性) 手術の後, びっくりして不安だった……先生を信頼しているとはいえ正直言って頭の中が真っ白に……退院後, 家族に良くなっていると言われてやっと安心できました。……手術直後は右目がきつい感じ。……道を聞かれなくなったので聞きにくい感じだったんだと思う。……最近はそうでもなくなってまた徐々に道を聞かれたり。……(家族は) 見慣れればこういう顔だったかなと思えるそうで。……自分自身もこんな自分もあるんだなーって思ってます……。

上記の語りにあるように, 患者の家族も同じような早さで新しい顔に慣れていっている。顔以外の部分ではどうだろう。豊胸術をした30代の女性は, かなり長いこと異物感を訴えていたが1年以上たった頃には「私の胸は元々こんなだったかなあと思ったりすることがあるかな……」と語っている。

それまでの身体像が手術後に大きく変わった例もある。その一人, 陥没乳頭の手術を受けたヨウコさん(20代, 女性)は, 聞き取り調査用の小部屋に入ってくるなり, 興奮した様子で「手術した後にみた夢では, 自分のからだに乳首がついていたんです」と語った。意味がよくわからないでいる私に対して, 彼女は次のように続けた。

(術後2週間) 手術前は, 夢の中でも乳首がなかったのに。……今までは, 乳首のない, 欠けた体のイメージが, いつもこのあたり[耳の後ろの辺りを指して]にまわりついていました。でも手術したらそれも消えました。……まだ腫れていて怪物みたいだけれど, 先生に腫れのことは聞いていたので心配はしてません。これでやっと今までの歯がゆい気持ちが解消できました。自分で努力して変えたということで自信が持てました。

ヨウコさんによれば, 今回の手術前にも数件の美容外科に電話したことがある。しかし「陥没乳頭」という言葉を言い出せずに診察には至らなかった。手術前は, 夫や友人とも胸の話題は避け, 旅行先では大浴場へは行かなかったと語っている。また普通ではないという意識から引かなくても良いところで引いてしまうとも述べていた。ヨウコさんの語りは, 身体が物質であると同時に想像力をもって繋ぎ合せるイメージであるものとして存在していることを示している。そして手術前はまるで亡霊のようにまわりついてきた乳首のない身体像は, 手術の後消えたのだ。

不満を抱いていた身体箇所なのだから, さっさと忘れて当たり前だという見方はできる。ただし〈自分〉であるという感覚や確信自体の流動性や相互性も考慮する必要がある。認知心理学の平岡⁽⁴⁶⁾齊士によれば, 身体の記憶自体がそもそも流動的で主観的である。直感的には顔の記憶は証明写真のような画像的情報として保持されているように思われていると平岡は述べる。担当医師から「人の噂は七十五日, 自分の顔を忘れるのも七十五日」と言われて驚いた筆者も, 画像情動的な身体認識の幻想を抱いていた一人といえる。平岡によれば, 同じ顔を見ても誰もが同じように見えているとは限らないし, 記憶として保存されている顔の情報も異なる。多くの場合, 自分の顔は実際より

良く記憶されているそうだ。平岡は、その人よりもその人らしい「超顔絵」には、形態情報以外の良く知っている人しか得られない情報が描かれていると説明している。

平岡の指摘は顔以外にも当てはまるだろう。たとえば後ろ姿であっても、背格好、姿勢、歩き方、着ているものや持ち物で、あの人ではないかと思いがつく。その人の同定は、身体の形の詳細な把握からではなく、表情、目つき、話し方、声、髪の毛、姿勢、持ち物、さらには居場所などから総合的に行っている。したがって同僚からみた「その人らしさ」、家族からみた「その人らしさ」、その人自身が思う「その人らしさ」は決して完全に重なるわけではない。平岡が指摘するように、それぞれの記憶内の「その人らしさ」の情報が大きく異なるからだ。

「その人らしさ」は、身体形態、声、喋り方、振る舞い、装い、嗜好性など様々な要因に支えられている。それらは当該人物の身体という器の中に詰まっているわけではなく、誰と一緒にいるか、どこにいるかで、そのありようが変わる可変的なものである。さらに、そもそも物質としての身体も常に変化している。だからコンピューターの画像認識では角度が違くと難しくなるような場合でも、私たちはやすやすと（時に人違いもあるが）認知できてしまう。日常生活において、人は、流動的で曖昧で相互作用的な関係の中で同定される。もちろん鏡や写真を前にした時は、目やにがついていないか、髪は乱れていないかなど、私たちの関心はもっぱら物質としての身体に集中する。そしてたとえば、突然シワやシミや左右のアンバランスに気づくことがある。それまで抱いていた〈自分〉にはなかった徴を突きつけられた時、違和感や失望感、あるいは拒否感を抱く人は少なくないはずだ。〈自分らしさ〉が、目の前に映し出された画像情報的な身体形態のある部分に回収されてしまうのは想像できないことではない。しかしここでみてきたように、日常生活での人の認知は、形態の微細な把握に基づいて行われるわけではない。身体の記憶自体が、流動的で主観的で総合的なのだ。それは「私の胸は元々こんなだったかなあ」、「手術した後にみた夢では、自分のからだに乳首がついていたんです」という患者たちの言葉にもあらわれている。

ピエール・ブルデューは、身体の社会的知覚に関する論考の中で、身体に対し資本が投下され関心が集中することの背景として人格との関係を次のように指摘している。⁽⁴⁷⁾

「人格」の現われは他にもあるが、この身体に現われた「人格」は、最も変化することが少なく、また最も変化させにくいものである。ほんの少しのあいだ変化させるのも難しいし、まして、根本的に新しいものにするなど不可能に近い。しかも、この身体は、本人の意図には関係のないところにあるのだから、「人格」なるものの「深い存在」つまり「本性 [= 自然]」を最もよく表す。こう社会的にみなされている。

[[「身体の社会的知覚」『身体政治技術』79-80頁]

ここから、身体を「改善」すれば人格が「改善」できるという考えも可能になる。歴史学者のエリザベス・ハイケン⁽⁴⁸⁾は、1930年代のアメリカで「人格整形手術 (the public personality operation)」が行われたと述べている。患者は、「パーソナリティショップ」で自分の人格にふさわしい顔を選ぶ。医師は模型を作り手術を始める。パーソナリティショップのその後は不明だが、美容整形による身体加工を人格改善に結び付ける見方は現在もメディアを中心に健在である。しか

し身体のありよう、人の同定自体が、流動的で曖昧で相互作用的なのである。次項では、韓国を参照点にしながら共同体的な人間関係のあり方、規範に着目する。

④……………関係の中の身体

1) 共同体的な人間関係—「ウリ(我々)」と「世間」

日本での聞き取り調査では、家族には美容整形を受けることを打ち明けているが、友人のレベルになると秘密にする率が高い。担当外科医は、手術結果と同じくらいに手術後をうまくやり過ごすことが重要だと述べている。これに対して美容整形大国の一つとして有名な韓国では、友人に話す率が日本に比べるとかなり高い⁽⁴⁹⁾。ソウル市の美容整形クリニックが集まる地域には、「形成外科（韓国語で成形外科）」「美容外科」の看板が複数掲げられているビルも見かける。また数年前から国家レベル、自治体レベルで、美容整形も含めたメディカルツーリズムも推進されている⁽⁵⁰⁾。ここでは一見対照的に思われる韓国と日本での美容整形への対応について、人間関係のあり方から考える。

まず韓国についていえば、「ウリ(우리)」と「ナム(남)」という人間関係が特徴的である。文化人類学者の伊藤亜人の解説を紹介しよう⁽⁵²⁾。「ウリ」は、自分の意思では所属を変えられない家庭や世帯や親族を基盤としている。「ウリ」は状況に応じて村や学校の同窓に対しても用いられ、特に大都会に転出した人々にとって故郷の親戚とともに出身学校の同窓生が織り成す人脈は大変結束が固い。韓国のウリ関係はほぼ無条件に信用できる関係であり、いざとなれば頼ったり甘えたりすることができる反面、これを疎んじることは難しい。一方「ナム」は「ウリ」以外の他人、無関係な人を指す。「ナム」に対しては自分の意思を通すことも、自分の利益追求も当然のこととして許され、互いにそれを前提としたドライな駆け引きが行われる。

ウリ関係は日本人が考える以上に親しく、ナム関係は日本人が考える以上にそっけないということになる。親しい友人もウリ関係とみなされる。ウリ関係の人からは、美容整形を勧められることもある。ただし勧められたからといってその勧めに従う必要はない。こうした場合に自分の気持ちを正直に表明することは、互いの関係性を損なうことにはならない。ウリ関係では、隠し事は水臭いとみなされる。また友達に対して、手術を受けた事を隠していることは重圧になりうる。筆者が聞き取り調査をした人たちは、「顔を手術すればたいていわかる。わかるのに言わないのは正直じゃない」、あるいは「隠していることに自分が耐えられない」と語っていた。手術を隠して水くさいとか正直でないと思われるよりは、自分からサッサと言ってしまった方が良いということになる。

手術に対する周囲の反応も直接的である。ヘウォンさん（重験術、20代、女性）が自分の手術経験を語り始めた時、同席していた韓国人女性の友人が驚いて次のように語った。

ええっ、ヘウォンさん、二重の手術受けてたの？全然知らなかった。でも、それじゃ、失敗でしょ、それ。だって全然二重になってないもん。失敗よ、失敗！

この時筆者は、ヘウォンさんの反応を心配して心臓が止まる思いだった。しかし彼女の反応は、

実にあっけらかんとしていた。

うーん、太っちゃったから。だから私また手術受けたいのよ。あー早く手術したい。

こうした楽天的な反応は特に珍しくはないようである。中には、「[手術]前の方が良かったのに」と言う人さえいるそうだ。言われた方はいえ、たいていはヘウォンさんのように「失敗しちゃったー」で終わってしまうらしい。美容整形を受けた方が良いと思えばそのように勧めるし、美容整形を受けたら親しい人たちには話すという人が多い。ただし何度か聞き取りを重ねていくうちに、それほど単純ではないことがわかる。たとえばヘウォンさんに、将来結婚相手に手術したことを伝えるかどうか尋ねてみると、「言わない」という答えが返ってきたのである。

ヘウォンさん：聞かれば正直に言うかもしれないけれど、言う必要もないし。

韓国人友人A：でも生まれた子供の目が一重だったらどうするの？そういうのってよくあるみたいよ。

ヘウォンさん：「あなたに似たのよ」って言う。

韓国人友人A：ダンナさんが二重だったら？

ヘウォンさん：あー、そしたら、「私も小さい時はこんなだった。この子も大きくなれば、私のように美人になるわ」って言うわよ〔笑い〕。

韓国人の友人には話しているというジウさん（隆鼻術、20代、女性）にも、詳しく聞いていくと以下のようにできることなら隠しておきたい心境が垣間見える。

〔私は〕性格が率直だから何でも話しちゃう。損かなと思うこともある。だって、同じクラスで一番きれいな子は目と鼻を手術したのに、「絶対してない」って言い張ってるもの。でも私はダメ。何でも話しちゃう。

確かに韓国の方が日本より美容整形に対して開放的である。ただし上記でみてきたように、ウリ関係では秘密にしづらい面もある。そうであれば、明るくさっさと話してしまう方が良い。整形したことを隠さない方が、人間関係を円滑にするという見方もできるのである。

翻って日本では、親しい友人に対しても秘密にする人が多い。たとえば以前から親友と豊胸手術について話していたという患者は、実際に手術したと言うのは憚られると語っている。また手術前には、何か言われても覚悟はできていると語っていた男性（隆鼻術、20代、学生）は、結局親しい友人に「適当にごまかして」話したと述べている。父親からは、「整形したことがわかったら世間体が悪い」と反対されたという。

この「世間」について、ドイツ中世の社会史が専門の阿部謹也は、日本における人間関係のあり方の基底だと主張している。⁽⁵³⁾阿部は日本人は世間の目を意識して生きているのだと述べる。たとえばすぐに見舞いや弔問をしないと、「世間」からはみ出してしまうのだと阿部は語っている。世間

からはみ出さないようにするには、何かをしなければならないし、何かをしてはならないということにもある。日本の美容整形は、長い間人々が最も信頼を置く大学病院ではほとんど実践されてこなかった。このことは美容整形をよりタブー化した面がある。普通であることが強調される日本において、美容整形を受けることは普通とみなされてこなかった。親しい人に対しても、美容整形を受けたことを話すのは躊躇する人が多いのは、自分と相手を取り囲む幾重もの世間が控えているからということができる。たとえば手術を決意したスエコさん（整鼻術、50代、女性）は、周りの反応を最も気にしていた患者である。

（手術前）一生「あの人は整形した」と噂されることになったら。……噂されることも嫌だけれど、それより自分が気になって耐えられないと思うんです。……あんまり高い鼻になって目立つのも困りますけど、ある程度成果がなければやる意味がないし……。

スエコさんは、手術後、夫からは「他人に言う必要はない」、親友には「自分以外の人には言わない方が良く」とアドバイスされたという。

韓国人のジウさんの日本留学中の経験は、美容整形に対する日韓の認識と態度の違いを如実に表している。

〔語学教師から〕「韓国では美容整形が盛んみただけけれど、ジウさん、あなたも他の韓国人女性のように手術してるんじゃない？」と聞かれましたけど、その時の雰囲気、正直に手術したと言ったら変に思われるってわかったから、「手術してない」って言ったんです。

ジウさんは、韓国では手術したことを隠してはいない。ところが語学留学していた日本では隠したというのである。日本では、秘密にしておいた方が人間関係に良いと考えられていることを咄嗟に感じ取ったといえる。

以上、韓国と日本の美容整形への対応について共同体的な規範や具体的な人間関係からみてきた。韓国のウリ関係では隠しごとをしないことが求められる。だから開放的に話す雰囲気がある。とはいえ、それだけで成り立っているわけではない。状況によっては話す必要はないと捉えられている。日本においては「世間」が集団的かつ具体的な関係を構成している。周囲の人、いわば世間が美容整形を受けたことをどうみなすか。美容整形が浸透してきているとはいえ否定的にみる見方も存在している。日本の美容整形は、人々から信頼を寄せられている大学病院で実践されてこなかった経緯もあって、胡散臭さやタブー的な雰囲気が強い。「普通」が相対的に強調される日本社会においては、美容整形を受けることは「普通でない」とみなされてきたといえる。手術で身体形態の悩みを解決しても、今度は「整形した人」というスティグマがついてまわるかもしれない。手術したと打ち明けられた方も、思ったことを言いづらい。世間からはみ出さないためには、美容整形については黙っておくのが一番無難といえる。喋らなくてもあまりに顕著に変わってしまったら美容整形をしたことが露見してしまう。手術目標を「普通」程度にとどめるのは、最もリスクが低いといえる。日本の患者の普通の強調と秘密重視の背景には、普通を強調する方が他の人の共感を得やすい

といった一時的状況や個人的な思惑だけでなく、普通がハードルとして立ちふさがることの苦悩、そして普通の社会的な強調という集団的な規範が考えられるのである。

このように一見対照的と思える韓国と日本の美容整形に対する対応は、それぞれの社会の共同体的な規範の中で、そのつど立ちあがる状況と人間関係において「その人らしさ」のようなものに齟齬をきたさないようにしているという点では共通しているといえる。現実の身体は、「わたしが持っているもの」として孤立して存在しているのではない。次項では、手術後の身体感覚および具体的な状況と他者との関係を例に身体と自己について検討する。

2) 他者と無縁には刷新しえない自己

前に述べたように、手術前の患者たちは厳しいまなざしで自らと他者の身体を審査していた。他者の前に出ることに何らかの困難を感じている人が少なくない。そういう人たちの語りから窺えるのは、身体的なコンプレックスで他者との関わり方が硬直してしまっている様子である。

(整鼻術, 20代, 男性) (手術前) 子供の頃から同級生に鼻をからかわれました。……自分は気が弱い性格なのでいじめ、ギャクの対象にされやすかった……。 (手術後) 20代に入ると顔は人生の問題の一部と考えられるようになりました……それでも鼻のコンプレックスはこびりつきしみついていた。……こびりついて、捨てたくても捨てられなかったものを捨てることができた……。

(陥没乳頭手術前, 20代, 女性) 今まで開業の美容外科に2, 3度電話してみたんですけど、「陥没乳頭」という言葉を言い出すことができなくて……普通ではないので引かなくてもいい所で引いてしまう……皆にあるものが無い、欠けている。

コンプレックスや負のイメージが亡霊のように身体に「こびりつきしみついていた」り、「いつもまとわりついている」ように、他の人たちとの硬直した関係のあり方は患者の身体にこびりつきまとわりついている。こうした他者とともにいるが困難になった身体のあり方は、手術前の患者の日常生活の様々な実践にしみわたっている。上記の「引かなくてもいい所で引いてしまう」という言葉は、それを自分らしくなかったと振り返っていることを示している。

手術後に患者が直面するのはまず痛みや何らかの違和感である。前述の整鼻術を受けた男性は、鼻への埋入物を「自分のもの」と認識しているせいもあってか、違和感が少ない方だった。

(術後2ヶ月) 自分の耳の軟骨を入れてるので、どちらにしても自分のものという意識が強い……思い込みかもしれませんが、自然に自分の鼻と思える。……親友にだけは一応話したんですけどね。でも全部話したんじゃなくて、適当にごまかして。……(3ヶ月後) 一つは手術したことを聞いて「あっ、そう」とサラリと受け流すタイプ。もう一つは遠まわしにおちょくるタイプ(笑い)……でも気になってしょうがないってことはない。……(2年後) 鼻は床屋へ行った時にギュッと押さえられた時に心配になります。あと鼻をかむ時もあまり強くかま

ないようにしています。

上記のように、彼は、2年たった頃には通常はほとんど意識していないと語っている。その感覚は、歯の治療で異物を入れることに近い。しかし周囲の反応を気にかける点で両者の間には違いがある。たとえば彼は、手術から3か月たった頃には周囲の反応を楽しんでいると語りつつも、大勢の前に出た時、ざわついていたので一瞬鼻のことかと緊張したと述べている。さし歯や歯列矯正など「普通」とみなされるようになった加工と、そうでない加工の差は大きい。

前に紹介したヒロコさんは、修正手術の前に「今の自分は仮の姿、本当の姿になって積極的にになりたい」と語っていた。入院中の彼女には、希望と諦めが交錯している。

(入院中) ……右目は満足してますけど左目はちょっと……ラインの上で開くような気がして……自分でもどこかでケリをつけなければと思います……自分の性格は少しでも希望が残っていると諦めきれない。いっそ「もう何も方法がない」と言われれば諦めるかもしれない。でもそれじゃ希望が全くなくなってしまうし……わかっているけれどどうにもできない……(術後4カ月)やはり理想の目ではないと思う……でも他人と目を合わせられるようになって、いろいろと親切にしてもらっているの、いつまでも目のことでクヨクヨしてはじまらないと思ってます。

その後彼女は、医師から「もうこれ以上は無理」と言われたそうで、修正手術を諦めた。したがって形態面では満足することはできなかったことになる。しかし自宅にひきこもる生活からまた社会との接点を持ち始め、「いろいろな人に会える」新しい仕事を楽しむようになっていった。手術前「今の姿は仮の姿、本当の姿になって積極的にになりたい」といっていたヒロコさんだが、手術後の言葉からみえてくるのは「仮の姿」と「本当の姿」の対立というよりも、別の身体の前に出ることができなくなってしまっていた手術前のヒロコさんの姿と、他の人と目を合わせられるようになって他者との関係を持ち始めた手術後のヒロコさんの姿である。

ヒロコさんの場合は、最初の手術結果が満足するものでなかった。ただし日本で筆者の調査を受け入れてくれた医師たちによると、技術的に成功であっても満足できない患者もいる。これは、美容整形の問題が身体形態だけに留まらないことを示唆している⁽⁵⁴⁾。スエコさん(整鼻術, 50代, 女性)の事例からみてみよう。彼女は以下のように手術後の違和感に言及しているものの、結果には満足していた患者の一人である。

(術後3週間)手術直後は自分の鼻のような感覚が全くありませんでした。その後、しびれが出て、触るとピリピリしていて鼻が詰まった感じで心配でした。一昨日から触ると感覚があって、昨日からは右の鼻は良くなりました。鼻が変になったらと不安なので家では笑わないように無口にしています。……(2カ月後)時々、痛み、かゆみがありますけれど、薄紙を剥ぐように良くなっているという感じです。

スエコさんは、手術前は鼻のコンプレックスのために公の席には出て行かないと述べていた。しかし手術後の「薄紙を剥ぐように良くなっている」という表現からは、術後の違和感とともに長年のコンプレックスも剥がれ落ちている様子が示唆される。そして、自分の身体に馴染んでゆくのと併行して、その身体で他の人の前にでていき、ともにいることに馴染んでゆく姿も垣間見えてくる。

(術後3週間) 夫からは他人に言う必要はないって言われたんですけど、親しくしている人にだけ打ち明けたんです。「ずっと留守だったのでどうしているかと思ってた」って言われて。その人に「自分以外の人には言わない方が良い」って言われたんです。言った方が気が楽ですけど……。……もう一人の友人に挨拶に行ったら「何か変わったみたい」って言われたんですけど、「そうかしら」ってごまかしたんです。お互い知らないふりを装って付き合ってますけど、なんか変な感じで……。普通はこういうことは言わないんでしょうけれど、私は弱いので親友には言うつもりですけど……。……(4カ月後) 今でも鼻の先が少し詰まっているような感じがします。でも一番心配だった周りの人の反応が、「少し痩せたみたい」という程度で、全く問題がなくて安心しました。

スエコさんをはじめとして患者たちからは、手術後周囲の反応を気にかけている様子が窺える。谷本が述べるように、自己の存在基盤が加工するという「行為」や「感覚・嗜好性」に宿るのだとすれば、手術後の患者が他者の前に出てともにいることを気にかける必要はない⁽⁵⁵⁾。

既に述べたように、日本の患者たちの「普通」の渴望の背景には、秘密にするためにあまり顕著な変化を望まない(「普通」にとどめる)という道筋もみえる。ただし秘密が保たれるだけで済むわけではない。周りの人たちが自分をどうみているのか。とりわけ手術前から付き合いのある人たちの反応は、程度の差はあれ誰もが気になるところである。しかし美容整形を受けたことを秘密にしていれば、直接感想を尋ねることはできない。周囲の人も、気軽には聞けない雰囲気がある。秘密を保ちつつ、患者たちは、日々のやり取りの中で周りの反応を感じ取っていく。微妙に異なる身体と自己の感覚。患者たちの〈自分〉という実感や確信は、普通の強調や世間といった共同体的な規範、様々なレベルの他者とのやり取りの中で立ち現れる。他者と無縁に患者の自己認識が刷新されるわけではないのである。前述した技術的に成功しても不満を訴える患者の存在も、秘密重視によって他者からの反応がわからないために疑心暗鬼になるということも考えられる。次に手術からある程度経過した時点からみてみよう。

3) 価値観と関係の捉えなおし、次の手術への扉

一般的に美容整形といえば、手術の間、もしくは術後の腫れがひくまでの少しの期間が想像される。しかし患者にとっての美容整形の経験とは、長年に亘る身体的悩みの経験、不安や反対を乗り越えての美容整形の決断、手術後の痛みと違和感の経験、そして手術後の周りの人たちとのやり取りなども含んでいる。この過程で、それまでの自分の思いや自分と他の人(友人、級友、配偶者など)との関わり方を捉え直す人もいる。

(整鼻術後, 20代, 男性) 長い間自分の殻に閉じこもり他の人に意識を向けるということが無かったかもしれない……手術して自分を縛りつけていたものから解放された。本当に自尊心がなかった。苛められるのは自分が悪いんだと責め続けていた。

(重瞼術後, 20代, 女性) 逆さ睫毛というより二重にする手術をやりたい自分が捨てられなかったんだと思います。……(川添: 私もアイプチ, 一度くらいは試してみようかな?) よした方がいいですよ。やめられなくなっちゃうから。

筆者には彼らが新しい地平に立っているようにみえた。人類学者の浮ヶ谷幸代は糖尿病患者の分析において葛藤や試行錯誤を経て「自分のからだ向き合う」時、自己の存在の意味への気づきや周囲の人たちとの関係を再構築していくと指摘している⁽⁵⁶⁾。美容整形の患者たちも、「自分のからだ向き合う」ことを余儀なくされる。彼らは、ある身体形態に強いコンプレックスや違和感を抱き、その多くがある程度長い逡巡の末に美容整形を決意する。たとえ決意した後でも、家族を説得したり、また自分自身が手術の怖れに揺れ動くこともある。やっと手術を受けた後には痛みや違和感を伴う自分の身体に馴染むこと、そしてその身体で他の人と会ったり場を共有することに馴染んでいく。それは身体の直接的な経験である。こうした長い過程の中で、自分の身体と他者の身体に向き合い、身体を直に経験することが、自分と周囲の人との関係を形作っていた美や普通性などの社会的価値観を見直すことに繋がっていると考えられる。

このように患者個人のレベルでは、美容整形を契機に固定化した自己認識や価値観が流動的に変化する可能性がある。しかし社会的レベルでは美容整形の実践は、潜在的な患者の増加、つまり身体的な苦悩の増加に通じる。患者の言葉にも美容整形の両義性が現れている。

(整鼻術, 50代, 女性) 美容整形はいつそなければ幸せ。ある以上はしないわけにはいかない。なければ諦めもついて、こんなに悩むこともなかったでしょうに……。

現状よりも「良い」状態が存在すると想定され、その技術が目の前に提示されている環境は、「より良い」状態にすべきであるという無言の圧力になりうる。上記女性の言葉は、「自由な」選択が、その選択を迫る抑圧と背中合わせであることを示している。

さらに次に紹介するように、手術直後は結果に満足していたのに時間が経過するにしたがって不満足感が生じる患者がいることも付け加えておかなければならない。

(乳房再建手術から半年後, 20代, 女性) 乳房は柔らかくなってきて本当に自分の胸という感じ。乳房再建前はダイエーの安いブラジャーにパッドとストッキングで詰め物をしただけだったんですけど、今ではお洒落なブラジャーが楽しめます。……以前は肩がすれ違っても傷があるのに、とか知人と体が触れるのも胸のことがわかるのではと心配で嫌だったんですけど、今では全然気になりません。……(術後8カ月) 再建した時は、それだけで嬉しかったんですけど、最近形が気になる……。ブラジャーを着ければわからないんですけど、左は右に比べ

て平らっばいんです。

(豊胸手術後1年以上, 20代, 女性) 顔のシミが気になるので, そのうちレーザーで取ってもらおうかと思う。そういうことも嫌という人がいるかもしれませんが私はもうその程度なら全然平気。……前にホクロを取った時は冒険だったんですけど, 今ではもうねえ。……整形慣れしたというか, これは皮膚科かな美容外科かなと考えてます。

上記二人の女性たちを含め, ある患者たちは術後も鏡や写真で自らの身体を頻繁にチェックしている。筆者は鏡や写真, 体重計やサイズ別の洋服などを「身体を映し出す装置」と呼びたい。⁽⁵⁷⁾それは身体の一瞬を切り取って像, あるいは数値にする。実際の身体は, 現実には常に変化している, 左右の形にしてもたいていは完全に対象ではない。さらに人の同定も, 実際には流動的で曖昧で相互作用的である。身体を映し出す装置があまりない状況であれば, 自分の顔や体は, 目の前の常に変化する曖昧だけれど確かな存在としての他者の顔や体の姿から推測するしかない。しかし現代は, 本来の流動性や曖昧性を否定するかのよう「身体を映し出す装置」が氾濫している。私たちは, 画像情報化, 数値化された身体に向き合う機会が多い。近代社会は, ボルドーが指摘しているように, 身体の管理=監視を, 個人が自らの生活に「ハビトゥス (身体技法の⁽⁵⁸⁾型)」として染み込ませていくようなシステムを作ってきた。⁽⁵⁹⁾自分を, 鏡や写真に映った像, あるいは体重計が示す数値に固定してしまう傾向は, ハビトゥスとして多くの人に共有されている。自分の顔や体は完全に見ることはできない。流動的で曖昧な〈自分〉感覚が, 画像情報的なデータの〈自分〉にすり変わる。その画像情報的な形態に, 心理的特徴や道徳的特徴を読み取ろうとする試みもあるし, 手術で思い通りに加工することで望みの人格が得られることを暗示する広告もある。身体を映し出す装置に映った像や数値に依拠して, 身体感覚や自己認識を研ぎ澄ませていけば, 近代の「わたしが持っているもの」としての身体観, 独立した, つまり孤立した〈個人〉像に振り回される。さらに手術の経験は, 患者のまなごしを手術前よりさらに厳しく差別的なものにする可能性がある。上記の患者以外にも, 手術後時間の経過にとまって微妙なバランスが気になる事例がある。女性患者の「整形慣れ」という言葉が示すように, 二度目の手術への敷居は一度目よりはずっと低くなる。そしてどのような施術であっても何らかのリスクがあることは言うまでもない。

価値観の捉え直しは, デービスが主張する新しい自分を作っていこうとする患者の能動的な選択にもみえる。⁽⁶⁰⁾また際限のない美容整形の繰り返しは, ボルドーが指摘した身体を管理・監視する近代システムの装置を通した自己正常化にみえる。⁽⁶¹⁾しかし馴染む過程に着目しながら美容整形の経験を全体としてみると, そこに浮かびあがってくるのは, 能動か受動かという対立ではなく, そのつどの状況と関係の中でたち現れる流動的で相互作用的な身体と自己のありようである。身体観においては, 伝統社会の「わたしがそうであるもの」としての身体と, 近代社会の「わたしが持っているもの」としての身体は断絶している。だからこそ美容整形の実践も可能になる。しかし患者たちの経験は, 自立した〈個人〉が自らの意志で「わたしが持っているもの」としての身体を加工しているという図式に依拠しているだけでは理解しきれない。生身の身体の経験までもが, 完全に近代社会の身体観と〈個人〉の観念に飲み込まれているわけではないのである。

おわりに

美容整形は、近代的身体観と近代的な〈個人〉の概念を前提にした近代テクノロジーである。近代以降、消費者でもある個人は、自らの意志で身体を変えることを選択できるようになった。これを受けて、人文社会科学では、美容整形をめぐって近代システムへの従属化に焦点を当てた研究と、当事者の能動性に着目した研究が対立的に議論されてきた。しかし手術前から手術後に亘る聞き取り調査をもとにした本稿の分析からは、受動か能動かという対立ではなく、共同体的な規範の中で、具体的な状況と他者との関係の中で、自らを認識しその認識の仕方をかえている姿が明らかになった。

日本の患者たちには、普通や人並みの渴望と秘密重視という特徴がある。こうした態度には、日本の美容整形のタブー性、世間、「普通」の相対的な強調が影響を与えていた。相対的に普通であることが強調される日本社会においては、美容整形を受けることは普通とはみなされてこなかった。世間からはみ出さないために患者は手術を秘密にする。あまり顕著に変わってしまったら美容整形を受けたことが露見してしまう。手術目標を普通にとどめるのは最もリスクが低いといえる。

こうした共同体的な規範の中で、患者は具体的な状況や関係を生きている。手術前、患者たちが「普通でない」と訴えていた身体は、日常生活全般に影を落としていたが手術後には案外あっけなく忘れられてしまう。固定化してしまった〈自分〉認識が、美容整形にきっかけに流動的に新たなものになる。しかし技術的な成功だけで刷新されるわけではない。違和感のある身体に馴染み、その身体で他者の前に出ることに馴染む過程で、手術前とは微妙に異なる身体感覚と他者との関わり方を〈自分〉に染み込ませてゆく。周囲の人がどのようにみているのか。手術を秘密にしている場合は、ともにいることで、また日々具体的にやり取りする中で感じ取ってゆく。患者たちの〈自分〉という感覚や確信は、閉ざされた自立的な〈個人〉が他者と無縁に作り上げるのではなく、日常的な他者との相互作用の中で培われる。この一連の中で、ある患者はそれまでの価値観や人間関係を内省するし、その後また画像情動的な〈自分〉認識にこだわっていく人もいる。

近代社会の身体観と近代的〈個人〉観が前提だからこそ、美容整形の実践が可能になる。しかし美容整形の経験までもが、近代的な身体観と個人観の枠にすっぽり収まっているわけではない。したがって規範への従属か能動的な選択か、あるいはマイナーチェンジとみる議論は、孤立し自立した近代的な〈個人〉を前提にしている点で解釈を狭めていると考えられる。本稿では、日本の患者たちの〈自分〉感覚や確信が、本来的に流動的で、相互作用的であることを示すことで、近代的身体観と〈個人〉概念と実際の個人の経験との間の齟齬について論じた。今回は、日本以外の地域での身体と自己のありようには踏み込めなかった。今後の課題としたい。

【付記】

調査に協力していただいた皆様に心より感謝申し上げます。国立歴史民俗博物館の山田慎也氏をはじめ共同研究のメンバーには、様々な機会にご助言をいただきました。なお本稿の基礎になった調査は、トヨタ財団（1997年度個人研究）の助成を受けた成果の一部であることを報告します。

註

(1)——美容整形の広告塔でもある外科医高須克弥は、整形は美容院や歯科医院の感覚に近づいていると語っている。高須によれば、特に若い世代に「プチ整形」を使い捨て感覚で行う傾向がある[「イマドキ整形美女の人生 [ビフォー→アフター]」『SPA』2006年4月18日号, 24-29頁]。

(2)——どのような施術でもリスクはあるが、経験不足の医師による医療過誤の事例も報告されている。国民生活センターには美容整形についての施術不良, 料金, 契約などの苦情が寄せられている[「美容医療に関わる消費者被害の未然防止に向けて」国民生活センター平成16年9月3日]。

(3)——モース, M. / 有地亨・山口俊夫訳『社会学と人類学』Ⅱ, 弘文堂, 1976年。

(4)——坂井信三「身体加工と儀礼」, 青木保・黒田悦子編『儀礼』東京大学出版会, 1988年, 193-213頁。

(5)——モース 前掲書。

(6)——社会的な人格と内的な自己の二分法は、それ自体、近代的自己のイデオロギーを反映しているという批判もある[中川理「主体性の解釈」『民族学研究』67(1), 2002年, 62-78頁]。

(7)——古谷嘉章「個人」, 浜本満・まり子編『人類学のコンセンサス』学術図書出版社, 1994年, 165-183頁。

(8)——デュモン, L. / 渡辺公三・浅野房一訳『個人主義論考』言叢社, 1993年。

(9)——中川は、伝統から近代への展開を、生活世界からの自然の離床、共同体からの個人の離床、人格(心/personhood)からの身体の離床、そして社会からの経済の離床という四つの離床で説明している[中川敏「コスモスからピュシスへ」『文化人類学』72(4), 2008年, 466-484頁]。生物医療あるいは生物医学(biomedicine)は、病気の原因やメカニズムを生物学的理論で説明し、それらの知見に基づいた治療法を行うことを基本とする医療。近代西欧医学と訳されることもある[佐藤純一「生物医学」『文化現象としての医療』1992年, 54-57頁]。

(10)——古谷 前掲論文。

(11)——①日本では某大学病院形成外科を中心に約5年間に亘り集中的な聞き取り調査を行った。インタビューは美容目的の患者56(女55, 男1)名に実施した。年代は10代から70代で、最も多かったのは20代である。職業は、会社員, 主婦, 学生, 無職等である。インタビューは、初回は半構造化方式を取り、その後はなるべ

く自由に語ってもらうようにした。調査は長期に亘ってできた人もいるが、初診だけ、あるいは終診だけの人もいる。診察期間中のインタビューは診察室か病室、調査者は白衣を着用、テープレコーダーは使用しないという条件のもとで行われた。こうした特殊な環境設定が何らかの影響を与えている可能性は否定できない。診察の必要がなくなってからは、電話や手紙で追跡調査を行った。本稿で用いた患者の名前は仮名である。個人が同定される可能性のあるデータ、あるいは不利になる可能性のあるデータは記載を差し控える。診察場面については可能な限り観察した。また美容外科担当の形成外科医(男性)をはじめ美容を専門としない形成外科医、開業の美容外科医にも聞き取り調査をした。②韓国では、90年代後半に聞き取り調査を2回行った。1回目は、某女子大学日本語学科の6クラスで身体意識についてのアンケート、ディスカッション、及び美容整形の経験者に個別に聞き取り調査をした。また男子学生および男性会社員にも話を聞いた。調査対象者は20代が多い。開業の美容外科医、形成外科医(韓国では成形外科)にも聞き取り調査を行った。2回目の調査では、某大学病院形成外科において美容目的の患者7名にインタビューを行った。そのうち2名には期間を置いて病院外でも話を聞いた。大学病院形成外科医、開業の美容外科医にも聞き取り調査を行った。その他1回目の調査で知り合った人には追跡調査を行った。

(12)——「自分が自分である」ということは、通常「(セルフ)アイデンティティ」概念で分析される。しかし筆者はアイデンティティという語が、日本でも万能なのか疑問にも感じている。たとえばフランス語では、「私(Je)」「君(Tu)」「あなた(Vous)」は明確に区分される。これに対して日本語の人称はそれぞれいくつもある上に、二人称は名字に代わるか省略されることが多い。(自分)という語についていえば、自己だけでなく他者にも用いられる。さらに禅では自己の概念が消えてしまう。そこで暫定的ではあるが、本稿の筆者のデータに関してはアイデンティティという語の代わりに(自分)という語を身体と自己を示す意味で用いることにした。

(13)——川添裕子「馴染む／馴染まない身体」, 日本文化人類学会第41回研究大会分科会「近代的規範からはみだす身体/自己」2007年6月2日。

(14)——Brown, J., The History of Plastic Surgery, American College of Surgeons Bulletin, 71(6),

pp.21-24, 1986.

(15)——Tagliacozzi, G., 1597. Brown 前掲論文から再引用, 21-22 頁。

(16)——塩谷信幸『美容外科の真実』講談社, 2000 年, 18-19 頁。

(17)——塩谷信幸「美容外科の歴史」, 難波雄哉他編『美容形成外科学』南江堂, 1987 年, 7-16 頁。

(18)——ギルマン, S. / 高山宏訳『健康と病』ありな書房, 1996 年, 101-114 頁。歴史学者のエリザベス・ハイケン は, アメリカで美容整形の基準となってきたのは白人(コーカシアン), 中でもアングロ・サクソン人(英国人)のものであると指摘している[ハイケン, E., / 野中邦子訳『プラスチック・ビューティー』平凡社, 1999 年]。アジア系アメリカ人の美容整形について調査した人類学者のコーは, 一重瞼や低い鼻は「眠気」, 「怠惰」, 「受動的」といった否定的な特徴とみなされ, 「脂肪過多」と呼ばれると述べている[Kaw, E., Medicalization of Racial Features. *Medical Anthropology Quarterly*, 7(1), pp.74-89, 1993]。また日本の『美容形成外科学』[1987: 289]でも, 「眼窩脂肪や, 中間結合組織, その他の皮下脂肪組織の過多は, 同時に腫れぼったい眠たそうな眼の印象を与える原因となる」という記述がある。一重瞼は美しくないというだけでなく, 否定的な人格特徴にも結び付けられ, かつ解剖学的にみても「過多」と表現される。

(19)——Davis, K., *Reshaping the Female Body*, Routledge, 1995.

(20)——塩谷 2000 年 前掲書, 18-19 頁。

(21)——「アメリカ美容形成外科学会 (ASAPS)」(1967 年設立) は, 会員による全国規模での統計を毎年公表している。2008 年の美容整形は 1,000 万件を超える。そのうち手術によるものは 17%, 手術によらないものは 83% を占める(「Cosmetic Plastic Surgery Statistics」(<http://www.cosmeticplasticsurgerystatistics.com/statistics.html>) 2010 年 3 月 27 日)。

(22)——「ヘルスツーリズム」(健康増進観光だけでなく医療検査や治療や美容整形も含んで使用されることが多い) と呼ばれることもある。利用者は海外の富裕層だが, 社会的, 経済的な上昇手段として美容整形を受ける現地の人たちもいる。

(23)——古川正重「美容形成外科の歴史的考察」『日本美容外科学会会報』1 (1), 1979 年, 26-27 頁。重瞼術に関して「十仁病院」(1938 年開設) の当時の院長梅沢文雄は, 1895 年美甘氏が初めて報告したと述べている[梅沢文雄「日本に於ける美容整形の変遷」『美容の

医学』7 (2), 1969 年, 1-4 頁]。十仁病院は, 1948 年に美容整形の研究会を発足させている。梅沢は, 「美容整形」という言葉を「plastic surgery, reconstruction surgery, cosmetic surgery」全てを含むものと定義し, 肉体美化の問題を解決する医学, 積極的に肉体を美化する医学として「美容医学」を提唱している。この「美容医学」の臨床面は美容内科と美容外科に大別される。美容外科は外面的に美化をはかるもので, 美容皮膚科と美容整形の二つに分けられる[梅沢 前掲論文, 3 頁]。梅沢の定義は, 今日美容医療への他科の進出を予測するものとなっている。

(24)——『医療政策六法』[中央法規出版, 2003 年, 31-32 頁]。形成外科医の塩谷信幸は, 標榜科の実態は広告規制であるが, 医師にとっては標榜科でなくては医学界で一人前に扱ってもらえないのだと指摘している[塩谷 2000 前掲書, 174-175 頁]。

(25)——標榜科獲得をめぐる以下のような背景があった。形成外科の中心人物である大森清一は, 美容を形成外科の生命線と考えていた。彼が中心となって 1958 年に発足した形成外科学会の機関誌の名称は『形成美容外科』となっている。これに対して, 形成外科は再建だけで美容は必要ないと考えるメンバーも少なくなかった。そのため『形成美容外科』は, 創刊から 4 年後には名称を『形成外科』と改める。形成外科は 1975 年に標榜科に認められるが, 「日本医師会」の当時の会長武見太郎から, 形成外科は美容を含めないようにと条件が出されたという。1977 年, 武見会長から厚生省(現厚生労働省)に翌年の通常国会で「美容整形」を標榜科にするという要求が出される。「日本形成外科学会 (JSPRS: Japan Society of Plastic and Reconstructive Surgery)」がその対応に苦慮していたところ, まず「日本整形外科学会 (The Japanese Orthopaedic Association)」から反対の声があがった。整形外科と名称がまぎらわしいので「整形」をはずすようにというものだった。そして日本形成外科学会にも反対声明を出すように迫った。日本形成外科学会は, 美容の独立は時期尚早として美容整形の標榜科に反対を表明する。標榜科をめぐる, 美容整形を実践する医師, 日本形成外科学会, 日本整形外科学会, 日本医師会, 与党, 野党, 管轄行政らの間で駆け引きが続いた。結局, 1978 年秋の臨時国会で, 美容整形ではなく「美容外科」という名称で標榜科として認められる[塩谷信幸「美容外科の薦め」『日本美容外科学会会報』24 (1), 2002 年, 17-18 頁]。本稿では一般に浸透している「美容整形」を用いる。

(26)——標榜科にともない、十仁病院を中心としたグループの「日本美容整形学会」は、その名称を「日本美容外科学会 (JSAS: Japan Society of Aesthetic Surgery)」に変更する [『日本美容外科学会誌』17 (2), 1979年, 50頁]。また当初美容整形の標榜科に反対していた形成外科のグループも、1977年に発足させた「日本整容形成外科研究会」を母体に1978年「日本美容外科学会 (JSAPS: Japan Society of Aesthetic Plastic Surgery)」を設立する (『日本美容外科学会』ホームページ http://www.jsaps.com/menu_04.html 2006年1月30日)。

(27)——女性週刊誌や雑誌に掲載されている美容整形の広告は、医師から広告料を取ったタイアップ記事 (『パブ広告』) の形をとっているものが多かった [大船博善『美容 (外科) 整形の内幕』医事薬業新報社, 1991年, 131-133頁]。医療に関する広告規制は、2002年4月から緩和され、専門医の資格、治療方法、手術件数なども広告できるようになった [『日本醫事新報』No.4067, 2002年, 76頁]。現在日本では、美容整形を行う病院・クリニックのほとんどがインターネット上にホームページを開設している。ネット上には美容関連サイトや「ミクシー/Mixi」などのソーシャルネットワークサービス (SNS) も開設されている。美容整形に関する新しい技術をいち早く知ることができ、匿名での相談や情報交換が可能だ。

(28)——『日本美容外科学会誌』。

(29)——岡部夕里「美容外科再発見」『日本美容外科学会誌』40 (3), 2003年, 60頁。

(30)——高須克弥「アジアンビューティの時代が来る」『日本美容外科学会誌』42 (4), 2005年, 104頁。

(31)——「日本美容外科学会 (JSAPS)」の学会誌『日本美容外科会報』に投稿された論文の方は、外科医の主観に頼る診断をいかに客観的なものにして、医療としての正統性を科学的に立証するかに重点が置かれてきたことが窺える。ところで本稿であげた『日本美容外科学会誌』と『日本美容外科学会会報』の特徴は組織的合意や方向性を示すものではあるが、二つの日本美容外科学会は単純に排他的なわけでない。一方の広告は全体の知名度をあげてきたし、どちらに属していても、病院経営にとっては市場論理も重要である。患者との間での齟齬を避けるために、診察の際には基本的には「患者の選択 (patient selection)」が行なわれる。両方の学会に属している医師もいる。またかねてから二つの日本美容外科学会の統合を主張する声もある。

(32)——1998年東京大学医学部附属病院 (東京都文京区) を皮切りに、他の大学病院も美容医療に進出している。東京大学医学部形成外科学教室 (東京大学医学部附属病院形成外科・美容外科) のホームページには、美容外科、美容皮膚科、ホルモン療法、再生医療までを含めた「美容医学」が掲げられている (『美容医学への扉』ホームページ <http://www.cosmetic-medicine.jp/> 2006年1月27日)。

(33)——平田修人「総合科学としての美容外科の展開」『日本美容外科学会誌』40 (3), 2003年, 68-73頁。

(34)——Bordo, S., *Unbearable Weight*, University of California Press, 1993.

(35)——この正常化は、女性たちを女らしさのみならず白人美の基準にも合致させるものである [Bordo 前掲書]。「normalization」は、フーコー, F./田村俣訳『監獄の誕生』[新潮社, 1977年]では「規格化」と訳されているが、ボルドーらフェミニズムにおいて正常化が用いられている。

(36)——Davis 前掲書。

(37)——谷本奈穂『美容整形と化粧の社会学』新曜社, 2008年。

(38)——谷本 [前掲書] が聞き取りをした整形経験者の施術内容は、記載が控えられている。

(39)——川添裕子「身体のポリティクス」博士論文, 2000年 (未刊行); 「美容外科手術とジェンダー」『ジェンダーで読む健康/セクシュアリティ』明石書店, 2003年, 225-253頁; 「『普通』を望む人たち」『現代医療の民族誌』明石書店, 2004年, 87-121頁。

(40)——聞き取り調査の限りにおいては、韓国では「普通」への渴望はみられなかった。詳細は川添 [2004年前掲論文] を参照されたい。

(41)——特に、大学病院では美容の患者の割合が圧倒的に少ないので、仮に美しくなりたいたいと思っても言いづらいということが考えられる。

(42)——河合隼雄『コンプレックス』岩波新書, 1971年。

(43)——ハイケン [前掲書] によれば、アメリカでは、コンプレックスは乗り越えるもの、予防するものとして浸透していった。コンプレックスという概念は外見を治療対象にする形成外科、美容整形とも結びつく。当時の形成外科には、健康な身体にメスを入れることに躊躇する外科医、また再建だけを扱うべきだと主張する外科医も少なくなかった。しかし美容整形は収入面、キャリア面で魅力的であるのも事実だった。そうしたところにアドラーのコンプレックスという概念が、美容整形参入の

理論的正当性として導入された。患者は一見健康にみえるが、肉体的なコンプレックスのために精神的に不安定になるなどの支障をきたしている病人とみなすことができる。手術によって外見の悩みを取り除くことが、患者の福利に寄与するという主張がなされるようになる。

(44)——河合 前掲書。

(45)——ミード, G. H., / 稲葉三千男他訳『精神, 自我, 社会』青木書店, 1973年。

(46)——平岡齊士「記憶の中の顔」『言語』2006年8月号, 52-55頁。

(47)——ブルデュー, P. / 桑田禮彰訳「身体の社会的知覚」『身体の政治技術』叢書社会と社会学3, 新評論, 1986年, 79-92頁。

(48)——ハイケン 前掲書, 132-133頁。

(49)——咸基善「韓国における美容成形の推移」『化粧文化』36, 1997年, 78-81頁」によれば, 韓国でも近代外科医学定着以前には, 「身体髪膚」という儒教理念のために外科手術に対して拒否感を持っていたが, 朝鮮戦争後外国人との交流が増加するにしたがって一部の階層から美容整形が始まった。筆者の聞き取り調査では, 韓国では儒教規範に反するから美容整形はすべきでないとする意見はほとんどなかった。身体髪膚言説との関連については, 川添 [2003年 前掲論文] を参照されたい。なお韓国では当初から大学病院でも美容医療が実施されている。

(50)——美容整形に限らず, 韓国ではしばしば一区域に

同業者が固まる光景を目にする。

(51)——韓国の「医療観光」(メディカルツーリズム)は, 総合健診, 形成外科一般, 歯科, 眼科, 不妊治療, 耳鼻咽喉科, 重症疾患, 漢方などを対象にしている(『韓国, 医療観光の地』韓国国際医療サービス協議会)。美容整形ツアーの利用者は中国や日本など海外からの観光客である(『朝鮮日報』2007年12月8日)。

(52)——伊藤亜人『アジア読本 韓国』河出書房新社, 1996年。

(53)——阿部謹也『日本社会で生きるということ』朝日新聞社, 1999年。

(54)——美容整形については「醜形恐怖」など精神的な問題も指摘されている。「醜形恐怖」は, 他覚的には異常がみられないのに, 自分の身体が醜い, 奇異な形をしていると訴える病態と定義されている(伊藤正男他, 『医学大辞典』第2版, 医学書院, 2009年, 1250頁)。本稿では, 醜形恐怖の問題は扱わない。

(55)——谷本 前掲書。

(56)——浮ヶ谷幸代『病気だけど病気ではない』誠信書房, 2004年。

(57)——川添 2000年 前掲論文。

(58)——モース 前掲書; ブルデュー, P., / 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン』藤原書店, 1990年。

(59)——Bordo 前掲書。

(60)——Davis 前掲書。

(61)——Bordo 前掲書。

(松蔭大学観光文化学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2010年9月27日受付, 2011年2月21日審査終了)

Fluidity and Interactivity Between Body and Sense of Self : An Anthropological Approach to Cosmetic Surgery in Japan

KAWAZOE Hiroko

This paper, which is based on interviews with cosmetic surgery patients in Japan and Korea, will examine the fluid and interactive relationship between body and sense of self on the part of the patient.

The body is a cultural artifact, forged by different cultural practices such as hair styling, make-up, tattooing, piercing, and of course cosmetic surgery. Body-mind dualism has allowed medicine and science to treat the body as an object, liberating people in modern society from traditional norms. Modern medical cosmetic surgery is advancing and has gained popularity because of our modern mindset.

The expansion of cosmetic surgery raises questions. Foucauldian feminists criticize normative feminine practices such as cosmetic surgery, arguing that male dominance and female subordination is reproduced through “self-normalization” in regard to everyday habits of masculinity and femininity. Other feminists see women who undergo cosmetic surgery as agents trying to “renegotiate” their identities through their bodies within the constraints of a gendered social order.

These two perspectives may appear to be conflicting, but can be seen as head and tail of the same coin—namely the modern Western individual seen as independent of society. In this framework, the self of a cosmetic surgery patient can be viewed as either subordinate to society or as being regenerated regardless of others after an operation.

However, my research on patients before and after surgery indicated the importance of situation and relationships, and of getting used to a new sense of body, social interaction, and personal relationships. Before surgery, the body and the sense of self of patients is fixed on the body parts that they see as problematic, constantly affecting the way they interact with people and how they feel in public. After surgery, patients tend to forget their former appearance relatively quickly, which suggests that the relationship between the body and the sense of self can be very fluid. However, technical success is not the be-all and end-all of cosmetic surgery, which in Japan is a marginal field of medical practice. Most patients keep their operations secret from people around them, and as they gradually become accustomed to their still painful and unfamiliar new bodies, they also get used to interacting with others and reading their reactions. They therefore come to adopt new feelings and

ways of social and personal interaction, and relationships.

Some patients later develop new dissatisfactions. We are surrounded by the mass media and face a constant barrage of messages demanding conformity with society's image of perfection and standard beauty care. We easily identify with two-dimensional images through photos, mirrors and so forth and evaluate our own value, but I have found that some patients reflect on previous values and attitudes.

My research findings as presented in this article suggest that the body and the sense of self are fluid and interactive, emerging from situations and relationships.

Keywords: body modification, modernity, relationships, biomedicine